

# 「極限」とは

藪崎 淳子

What is the “*Kyokugen*” which is a term of the explanation of “*Toritate*” ?

Junko YABUZAKI

## 1. はじめに

本稿で扱う「極限」とは、「副助詞」、あるいは「取り立て助詞」と呼ばれる、次のような助詞の意味記述に従来用いられている術語である。

(1) 家族に {さえ／まで} 裏切られた。

(2) 仕事を失い、貯金も底をついた上に、妻 {さえ／まで} も出て行った。

(1) で助詞が示しているのは「家族」である。しかし、“知り合い、友達、親戚、親友に加えて、家族にも裏切られた” という意味を表す。このように当該用法のサエ・マデは、文中の項目を示すことで、他の項目を想起させる「範列関係」を表す（丹羽 1992、藪崎 2017）。この「範列関係」にある項目は、(1) のように文中に明示されない場合もあれば、(2) のように文中に明示される場合もある。(2) は“仕事を失うこと”、“貯金が底をつくこと”に加えて、“妻が家を出て行く” という意味を表す。また、当該の助詞は、(1) の「家族」のように、助詞の直前の項目を取り上げることもあれば、(2) の“妻が出て行った”のように、助詞の直前の項目と述語との結びつきが表す事態を取り上げることもある。しかし、(1) (2) は当該の項目・事態を助詞で示すことで、他の項目・事態が想起される「範列関係」を表すこと、また「範列関係」にある項目同士が「累加」の関係にあることを表す点で共通する他、助詞の示す項目が表す事態の実現に対する驚きの気持ちを伴う点も同じである。(1) では“裏切るとは思っていなかった家族にも裏切られた” という意味を、(2) では“起きないと思っていた、妻が家を出るということも起きた” といった意味を表す。こうした意味を表す点で共通するサエやマデに対し、他のダケやバカリなどと区別して貼られるラベルが「極限」である。「極限」は (1) (2) のような助詞の意味を端的に表せるため、日本語記述文法研究会（2009）の他、従来の記事に少なからず用いられている<sup>1</sup>。しかし、その

---

1 サエやマデには「意外」という術語が用いられたり（沼田 2009 など）、「意外性」という術語が用いられたり（益岡・田窪 1992）することもある。「意外」についても問う必要があるが、これは稿を改めて論じる。

定義を明確に記すものは少なく、また定義が示されていても、実はその内容は立場によって異なっている。その異なりが出ることの背後に、用例を分析する者の読み取りの問題があると本稿は考える<sup>2</sup>。

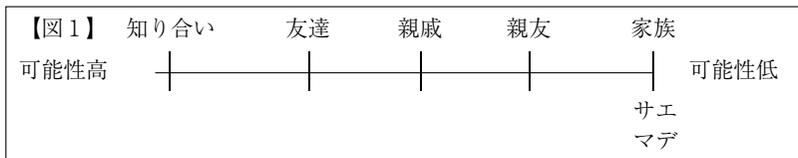
## 2. 「極限」をめぐる2つの捉え方

「極限」の捉え方は大きく2つに分けられる。1つは、助詞が示す項目、及びそれによって想起される項目の序列における最端を「極限」とする立場であり、もう1つは、そうした序列の最端か否かには関知せずに「極限」を定義する立場である。以下、順にみていこう。

### 2.1 項目間の序列における最端を「極限」とする立場

井島（2007）は「極限」について次のように定義している。

- (3) 〈極限〉とは期待世界におけるスケール上での限界値のことであり、当該事態が実現されているかどうかには直接関わりがない。(p.57)
- (3) に対する本稿の理解を、(1)「家族に {さえ／まで} 裏切られた。」を例に示したのが次の図1である。



“裏切る人”という意味で同類の“知り合い、友達……家族”という項目は、“裏切る”可能性の高い項目から、よりその可能性の低い項目へと序列づけられ、スケールを形成する。井島（2007）の「極限」は、このスケールの最端で、最も実現可能性が低い項目である「極限值」を当該の助詞が示すことを指していると読める。また、(3)には「当該事態が実現されているかどうかには直接関わりがない」ともある。これは、(1)のように既実現の事態を表す場合だけでなく、未実現の事態でも、スケール上の最も実現可能性が低いと見込む項目を当該助詞が指し示していれば、それは「極限」であるということだと理解される。

井島（2007）のように項目間の序列の位置に着目し、マデやサエの意味を捉えることは、中西

2 尾山（2019）は日本語の表記研究において、用例を分析する者が、文字・表記から過剰に意味・意図を読み取り、それを作者の考えであるとして返してしまう場合があることを指摘している。用例を分析する者の読み取りに留意する必要があるという発想は、尾山（2019）にその着想を得た。

(1995)、日本語記述文法研究会 (2009)、沼田 (2009) などにも見られる<sup>3</sup>。

## 2.2 項目間の序列の位置に関知せず「極限」を定義する立場

菊地 (2003) は「限度が設定された上で、その位置が極端である (中略) が否かにかかわらず、「普通に期待されることを離れている」ということを、卑近な言い方をすれば「大変なことだ」「べらぼうだ」といったことをあらわすのが極限系のとりたてである」(p.87) と述べる。つまり、当該助詞が項目間の序列の最端を示すか否かには関知しない。そして、菊地 (2003) は「一口に〈極限的なことを述べる〉といっても」、「「こんなことまで起こった」というように①〈起こったこと (の極限性) を述べる〉」場合と、「「それほど～である」というように②〈性質・状況 (の極限性) を物語る〉」(pp.92-93) (下線と番号は本稿執筆者による、以下同じ) 場合があると述べる。

(4) 今日は急な来客が次々あって、そこへ厄介な問題が起こって臨時の会議が二つ入った後、訃報 {?? さえ/まで} 入った。こんな日もあるんだね。(菊地 2003:93 の (21') を一部改変)

(5) 今日は急な来客が次々あって、そこへ厄介な問題が起こって臨時の会議が二つ入った後、訃報 {さえ/まで} 入るとい、何とも慌ただしい一日だった。(菊地 2003:93 の (21'') を一部改変)

(4) は「こんな日もあるんだね」と「起こったことの極限性」を、(5) は「何とも慌ただしい一日だった」と「性質・状況の極限性」を表すとある (p.93)。①「起こったことの極限性」は、助詞が示す項目の表す事態が実現することを前提とする概念ととれる。この点、井島 (2007) の「極限」が「当該事態が実現されているかどうかには直接関わりがない」とするのと対蹠的である。②「性質・状況の極限性」については、これと同様の概念を「極限」とする先行論は管見の限り見られないものの、「性質・状況の極限性」と類似の概念を意味記述に用いているものはある。『時代別国語大辞典上代編』の「さへ」の項目には、「指す対象が動作・状態の及ぶ対象のすべてであるような場合、副詞的な全量あるいは最高程度の意になる」(p.339「さへ」②の©) という記述があり、その例として (6)～(8) をあげる<sup>4</sup>。

(6) 人目多みあはなくのみぞ心<sup>き</sup>左<sup>へ</sup>倍妹を忘れて吾が思はなくに (万 770)

(7) 若かりし肌も皺みぬ黒かりし髪も白けぬゆなゆなはいき<sup>き</sup>左<sup>へ</sup>倍絶えて後遂に命死にける (万 1740)

3 中西 (1995:310) は「序列的に想定されるスケール上の他者に、最もありそうにない自者 (中略) を付加する」場合に「サエとマデの交換を許す」としている。日本語記述文法研究会 (2009:87) には、「極限のとりたてでは、ありそうなものから、なさそうな極限のものまでが序列として考えられていることが多い」とある。また、沼田 (2009:167) にマデの「[自者] は序列上の最下限」とある。

4 小田 (2015:415) は「さへ」について「極端な事物や事態をあげて、「実現可能性の低いものまでも実現している」という、強い程度を表す表現を作ることがある」と記述している。この「強い程度を表す表現」というのは、『時代別国語大辞典上代編』の記述、及び菊地 (2003) の「性質・状況の極限性」と同様のことを意味していると読めるが、確証は得がたい。

(8) 心左<sup>き</sup>倍奉<sup>へ</sup>れる君に何をかも言はず言ひしと我がぬすまはむ (万 2573)

そして、「指示されるものが全的なものであって、ほかに暗示しようもないとき、(中略) すっかりという意味の副詞で置き換えうるような意味が生まれる」(p.339)とも記している。用例に関する説明はないものの、(6)であれば、“すっかりあなたを忘れる”という高い程度には至っていないことを表す、という記述にとれる。同様に(7)であれば、“老い”の程度、(8)であれば“相手を慕う”程度がそれぞれ「最高程度」であることをサへによって表すということの意味していると読める。「副詞的」が述語の表す事態全体を修飾することを意味しているのであれば、これは菊地(2003)の「性質・状況の極限性」と同様であると理解される。また、寺村(1991)も「極限」という術語は用いていないものの、菊地(2003)の「性質・状況の極限性」と類似しているととれる記述をしている。

(9) その一連の出来事を署長さえ知らなかった。(寺村 1991:104 の(329))

(10) お任せ時代 日記まで

忙しくて日記を書けない人たちに代わってつけてくれる「日記代行会社」が、東京・代々木に最近登場した。(寺村 1991:117 の(399))

(9) については、「③署長という立場にある人は、その一連の出来事を知らない人の「集合の中心から最も遠いところに位置するはずの人である」という「影との対比によって、この場合の署の体制(中略)の不完全さ、または盲点のようなものが強調されている」(p.104-105)と述べる。そして、「「XサエP」を言うことによって、その文脈で言おうとしている④なんらかの事態の(程度)の異常さを相手に印象付ける効果が生じる」(p.104)とする。(10)については、「ここではマデを使うことによって、(いろいろなことにお金を払って他人に代行してもらう人でも、まさか最もプライベートな日記を代行してつけてもらうことはないだろう、ところがなんと、それを代行することが商売として成り立っているのだ、いくら便利な時代といっても、こんなに⑤何でもかでも代行してもらう風潮が極端になるとは驚いたことだ)という書き手の気持ちが伝わってくる」と述べる。さらに、これがサエでは、「日記」と「代行」との結びつきの意外さを強調することはできるだろうけれども、「何でもかでも代行全盛時代」という感じまでは出せない」(p.123)としている<sup>5</sup>。下線部③の記述は、井島(2007)の「極限」、即ち項目間の序列における最端を助詞が示すことを説明したものととれる。寺村(1991)が下線部④「事態の(程度)の異常さ」、⑤「風潮が極端」としていること、それぞれの内容に差があるとは読み取りがたく、いずれも菊地(2003)の②「性質・状況の極限性」と同様のことを指しているように理解される。

---

5 寺村(1991)にある、サエの表す④と、マデの表す⑤が、同じか否かについての言及はないものの、いずれも菊地(2003)の「性質・状況の極限性」と類似の概念だと読める。なお、当該の意味をサエが表すのか、マデが表すのかという問題もあるが、ここでは「極限」という術語のもとに、どのような議論がなされてきたのかを見ることに主眼があるので、この問題には立ち入らない。

### 2.3 3つの「極限」

以上見てきたように、先行論における「極限」という術語は、項目間の序列の位置を指すか、それには関知しないかで2通りある。そして、後者には「起こったことの極限性」を指す場合と、「性質・状況の極限性」を指す場合がある。

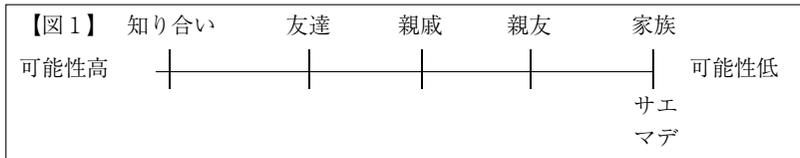
## 3. 問題の所在

2節で「極限」が3つの意味で用いられていることを見た。先に断っておかなければならないが、本稿は術語の定義の是非を問おうとしているわけではない。「極限」という意味がどのような判断に基づいて記述されてきたのか、より具体的には、記述の根拠となる用例が、如何にして分析されてきたのか、というところに考察の主眼がある。

本稿も含め、用例をもとに、ある言語形式の意味を記述する者は、その用例の「聞き手・読み手」であって、「話し手・書き手」ではない、というごく当たり前であるが、重要な事実をまず再確認する必要がある。

(1) 家族に「さえ／まで」裏切られた。

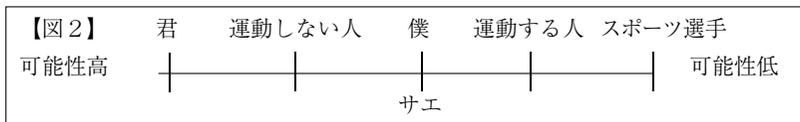
という例について、本稿は2.1で次の図1を描いた。



しかし、話し手・書き手が同じスケールを描いて、(1)を産出したという保証はない。

(11) 僕でさえ疲れたのだから、君はどんなに疲れたことだろう。(菊地 2003:98 の (10))

菊地(2003)は(11)について、「大勢の人の中で「僕」が最も疲れにくい(最も頑丈だ)というケースでなくても、すなわち「僕」が「君」より数段頑丈だという程度でも使われる」と述べる。この「大勢の人の中で「僕」が最も疲れにくい」というケースでないことを図示すれば、図2のようになろう。



「僕」よりも疲れる可能性が低い人が「大勢」いると考え、「普段から運動をしている人」や「スポーツ選手」を想起すると、確かに上のようなスケールを描くことができる。ただし、話し手・書き手の念頭には、「疲れやすい君」と「疲れにくい僕」という項目しかなく、図2のようなスケール

「極限」とは

ルに基づいて (11) を産出した可能性も否定できない。



話し手・書き手が、図2と図2'のどちらを描いていたのか、聞き手・読み手が例から決めることはできない。

(9) その一連の出来事を署長さえ知らなかった。(再掲)

(10) お任せ時代 日記まで

忙しくて日記を書けない人たちに代わってつけてくれる「日記代行会社」が、東京・代々木に最近登場した。(再掲)

寺村(1991)は、(9)について「なんらかの事態の(程度の)異常さを相手に印象付ける効果」があると述べている。確かに、“署の体制が不完全である”という文脈に(9)があっても何ら不思議ではない。また、(10)についても寺村(1991)が「何でもかでも代行してもらう風潮が極端」であると述べるように、“自分のことを代行させることの気軽さの程度が甚だしい”といった意味を表しているようにとれる。しかし、こうした解釈をしている本稿は、あくまで聞き手・読み手であって、話し手・書き手がそうした意味を表す意図でサエ、マデを用いて表現したのか否かは確かめることができない。もちろん、話し手・書き手が事態の異常さや極端さを表すことを意図し、サエ・マデを用いて(9)(10)を産出した可能性も同じく否定されるわけではないが、そうした意図のもとにサエ・マデを用いたのではないという可能性を排除することもできない。もしも、話し手・書き手が事態の異常さや極端さを表すことに主眼をおくならば、次のように表現する余地もあったのではないだろうか。

(9') 一連の出来事を署長が知らないほど、その組織の体制は不完全だ。

(10') 気軽に何でも代行 ついに「日記代行会社」が、東京・代々木に最近登場した。

当該助詞の表す意味は何であるのか、それを分析する者は、聞き手・読み手の一人に過ぎない。それをあたかも話し手・書き手に成り代わったかのように特定し、スケールを描いたり、文中に直接表現されていない意図を説明したりしていないかどうか、今一度留意する必要がある。

#### 4. 何を見て分析するのか

目に見えない言語形式の意味を考究しようと用例と向き合うなかで、話し手・書き手が意図しているか否か分からないことまで過剰に読み取り、それを当該助詞の意味として記述してしまう。仮に、その先行論と同様の読みがなされなければ、また別の読みをベースとした新たな記述が生

まれる。これは記述内容の進展ではなく、単に読み取った内容が異なるだけである。では、聞き手・読み手である本稿は、如何にして分析すべきか。本稿は、第三者にも検証可能な次の2つを見ることができ、主観的な読み取りをできる限り排除し、再現性のある分析が可能となると考える。

- i. 文中・文脈の共起成分
- ii. 他の用法との関係

以下、「極限」の3種、「項目間の序列の最端」（井島 2007）、「起こったことの極限性」「性質・状況の極限性」（菊地 2003）について、上の2つの点から考える。

#### 4.1 i. 文中・文脈の共起成分

##### 4.1.1 項目間の序列の最端を示すか

ここでは、項目間の序列の最端を示すか否かについて、文中・文脈の共起成分から見ていく。

当該助詞で示す項目が、話し手・書き手の描くスケールの最端であることを直接保証する「ことば」や「記号」のようなものが文中に示されることはない。ただし、次のようにスケールを形成する項目が複数文中に並べられ、その中で実現可能性が最も低いものを示し、その後次の話題へと転換している場合、スケールの最も端を示していると判断しても、その判断は客観的であると言ってよからう。

(12) おれに生き方を教えようなんて、いったいなにさまのつもりなんだ。生きることについてなにひとつわかっちゃいけないくせに。あんたには女房や息子のことも、自分の心がどう働くかさえもわかっていない。働かせる必要が一度もなかったからだ。(BCCWJ『あぶない部長刑事』)

(13) 俺はまったく空白の状態で自転車を走らせていた。特に急坂を登るときはそうだ。今、どこにいるのか。どこからどこへ、何のために走っているのか。俺自身が何者かさえ思い出せない瞬間もある。そんなときに、何でもない風景が目飛び込んでくることがある。緑の樹々や青い空や白い雲。(BCCWJ『男たちは北へ』)

(12) は、「女房や息子のこと」「自分の心がどう働くか」が「わかっていない」こととして並べられている。サエの示す「自分の心がどう働くか」は、「女房や息子のこと」に比して、「わからない」ことの実現可能性が低く、それ以上に実現可能性が低い項目が提示されないまま、次の話へと転換している。このことから、(12)のサエはスケールの最端を示していると捉えられる。(13) は、「思い出せない」という意味で同類の“現在地”“出発地から目的地”“目的”に加えて「俺自身が何者か」が助詞で示される。この「俺自身が何者か」は、他の文中の項目に比べて「思い出せない」ことの実現可能性が最も低い。また、その後の文脈に新たな項目が提示されることなく、「思い出せない」ことについての話は終わり、次の話へと移っていることから、このサエが示す項目もスケールの最端であると理解される。助詞の示す項目がスケールのどこに位置するかとい

うことが、文中や文脈に何かの指標によって示されることはない。しかし、(12) や (13) のように、スケール上の複数の項目が序列づけられて文脈に示され、そのうち最も実現可能性が低い項目を助詞で示し、さらに新たな項目が追加されていない場合、それはスケールの最端を示しているのだと捉えることは、聞き手・読み手の主観的な読みではなく、可視的な根拠に基づく分析である。

一方、スケールの最端を示していない場合については、共起成分から明確となる。

- (14) (竜一のそばにいられなくなることについて) (中略) いやだ! そんなのは耐えられない。これほどそばにいて、毎日会っていて、それでさえ、耐えがたいほど遠い、と感じているのだ。となりのへやにいるの A さえ、一時間姿をみしていないの B さえ、服一枚が間をへだてているの C さえ、それどころか皮膚と皮膚へだてている別々の存在であるの D さえいやなのだ。(BCCWJ『終わりのないラブソング』)
- (15) 十四日の午後、市長から「家族の遺骨を一応仮埋葬したいので手伝ってほしい」といわれ、午後三時過ぎから市長にお供して坂本町大学病院上の墓地に行き、仮埋葬をすませた。坊さんの読経もなく、参列者もない淋しい限りの仮埋葬であった。しかし、遺骨 A さえ拾えない人、家族の死体 B さえ捜し出せない多くの人のことを思えばまだ幸せではないかと、墓地の仏前で二人して話しながら帰った。(BCCWJ『日本の原爆記録』)

(14) は、話し手が「いやだ」と感じることで、A～Dへと並べられている。Aの「となりのへやにいる」ことを「いやだ」と感じることも実現可能性が低いが、B、Cとより実現可能性が低い項目が続き、Dの話し手と「竜一」が「別々の存在である」という最も実現可能性が低い項目へと至っている。サエは最も実現可能性が低いDだけでなく、A～Cにも用いられていることから、サエが指し示すのはスケールの最端でなくてもよいことが分かる。同様に、(15)も“遺骨があり、読経があつての埋葬”が通常であるのに対し、Aの“遺骨が拾えないこと”に加えて、Bの“死体を捜し出せないこと”、つまり安否すら分からないという、より実現可能性の低い項目が並び、そのいずれもサエで示していることから、必ずしもスケールの最端を示さずともよいことが分かる<sup>6</sup>。

(14) (15) のように、サエによって項目が並列される他、次の(16)～(18)のように、他の助詞や複合辞によってスケールの最端の項目が示され、当該の項目が最も実現可能性が低いものではないことが明示される場合もある。

- (16) 皆んな大柄だったせいもあって伊勢は威圧感に似たもの さえ 感じたが、それにもまして、白人の女群に囲まれたのは初めてだったから 異様な体臭 すら 覚えて、鬼ヶ島に一人とり残

6 沼田(2009:144)に、「許容度は落ちる」としながら、(14) (15) のようなサエの「重複構造が考えられる」との指摘がある。

されたような変な恐怖感もてつだって「こらっ、どけっ」あわてて、女を突きとばした。  
(BCCWJ『さらば上海・江南の空』)

- (17) 日本では、場末の妙なモルタル造りのスナックに「さえ」「パブ〇〇」などと名を付け、甚だしきは「カラオケパブ」だの、「女学生パブ」なんというばかげた代物まである始末で、パブという名辞もずいぶん安く踏まれたものだと、イギリスのほんとの「PUB」のために惜しまれること一方でない。(イギリスはおいしい)
- (18) バーベキュー・パーティーに招かれて「わあ、こんないい火で鰯をじゅうじゅう焼いて食べられたらなあ」と口走り、野蛮人を見るような視線に囲まれたこともある。焼き魚の匂いなど世にもおぞましいというミートイーターは少なくないのだ。海老「さえ」も「あんな虫扱いたいなもの、よく食べられるわね」と言う人がいるし、イカやタコに至ってはモンスター扱いで、真っ黒なイカの墨煮とか、紅い酢蛸にかぶりつく女なんて、いもりの黒焼きや赤んぼうの心臓に舌なめずりする魔法の同類と思われても仕方がない。(聡明な女は料理がうまい)

(16) ではスラが、(17) ではマデが、サエの示す項目よりもさらに実現可能性が低い項目を示している。また、(18) ではサエの示す“海老を虫扱いする”よりも実現可能性が低い“イカやタコをモンスター扱いする”ことが「に至っては」という複合辞によって加えられている。このように、スケールの最端を示さないことは、文中・文脈に実際に現れていることから捉えることができる。

以上から、項目間の序列の最端を示すか否かということは、文中・文脈の共起成分から客観的に判断できること、またサエは常に序列の最端の項目を示すわけではないことも分かる。

#### 4.1.2 「起こったことの極限性」を表すか

「起こったことの極限性」は、助詞が示す項目の表す事態が実現することによって生じる“驚くことだ”“意外である”という意味を指すものと、本稿は理解している。具体的には次のような例において、「起こったことの極限性」を表していると言えよう。

- (19) コリンはなにも食べなかった。いつものように、船がドックを出たとたんに軽い船酔いにかかってしまったからだ。経験から、一時間くらいたてばよくなることはわかっていたが、治るまではなにも口にしなくなかった。すでに一時間たっているのに、クッキー二個をかじり、オレンジジュースを飲んだこと「さえ」後悔していた。(BCCWJ『闇の囁き』)
- (20) 昼下りの屋上には春の陽射しがふり注ぎ、心地よい風「さえ」吹いている。(BCCWJ『女外科医有森冴子』)

(19) は「オレンジジュースを飲んだ」という既実現のことを「後悔」していることを表し、(20) は“心地よい風が吹く”ということが発話時において実現していることを表している。このよう

に、助詞が示す項目が表す事態が既実現、あるいは発話時現在である場合、「起こったことの極限性」を表していることが確認される。一方、次のような例においては、「起こったことの極限性」を表してはいないと言える。

- (21) アンキロサウルスが、「これまでこの世界で見られたもので、最も重い、生きているとりで」と記載されたのは、当をえている。その先には、たぶん象のような足のついていた、短い、重い脚のため、この動物の高さは低かっただろう。また攻撃されたとき、胴を少しさげるだけで、ほとんど固い装甲からできた難攻不落の塊となっただろう。これに対しては、その巨大な同時代の動物、ティラノサウルスでさえ、もちろんその背をひっくりかえすことができれば、攻撃することがむなしかったにちがいない。(BCCWJ『恐竜』)
- (22) デピネー夫人の健康がもっと悪くなりでもしたら、彼はおまえを自分の手もとに置いておくのがたやすくはなくなります。おまえがあらゆることに対して気づかなくてはならないとなると、おまえは昼も夜も心配をしなければならぬだろうし、死にもの狂いで走りまわらねばならなくなります。しかも、それでもおまえは騙されやすいから、なにか節約できるどころか、暮らしてさえ行けなくなってしまうでしょう。(BCCWJ『モーツァルト書簡全集』)
- (23) 僕はおそらくいつまでも、まるで昨日のこのようにこの世界とそこに住む人々のことを覚えているだろう。(中略) 僕はあの門番をさえきつと懐かしむことだろう。

(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

(21) では、アンキロサウルスをひっくりかえすことができない場合、ティラノサウルスにとってその攻撃が「むなしかったにちがいない」とある。つまり、ここでは話し手の考えを述べているのであり、実際にそうであったという「起こったこと」を述べているものではない。(22) (23) はいずれも「だろう」が文末に接続し、発話時以後のことを推量しているものである。“暮らすことがままならなくなる”こと、“親しくしていたわけではない門番を懐かしむ”ことは驚くような事態ではあるが、「起こったことの極限性」ではない。

以上のように、助詞の生起する文の述語によって、「起こったことの極限性」を表すか否かを客観的に判定することができること、加えてサエは常に「起こったことの極限性」を表すわけではないことが分かる。

#### 4.1.3 「性質・状況の極限性」を表すか

「性質・状況の極限性」とは、寺村(1991)のことはを借りれば「[XサエP]を言うことによって、その文脈で言おうとしているなんらかの事態の(程度の)異常さを相手に印象付ける効果」のことである。

- (24) 「まったくぼくらは日本語をいい加減にしか知らないんだね」 矢口はある日、吐息まじりに

言った。「〈これは〉と〈これが〉の相違でさえ、どうやって説明していいか、わからないんだ。  
(BCCWJ『時の扉』)

(25) この部落では絶対に写真撮影を許されない。人物はおろか家や景色の端っこさえフィルムに盗むことはできないのだけど、これがまた撮りたくなる風景なのですよ。(BCCWJ『男ざかりの美学』)

(24) は、「まったくぼくらは日本語をいい加減にしか知らない」とあることから、日本語を知っている程度がいかにいい加減であるのか、その程度が甚だしいことを表しているのとれる。(25)も前の文に「絶対に写真撮影を許されない」とあり、写真撮影をいかに厳しく禁じているのか、その程度が非常に高いことを表していると読める。「性質・状況の極限性」が、こうした事態の程度の甚だしさを指すのであれば、(24)(25)は「性質・状況の極限性」を表していると言え、それが文脈から確かめられる。ただし、この「性質・状況の極限性」という意味をサエそのものが表していると見てよいのかという点には疑問も残る。(24)のサエによって表されているのは、「〈これは〉と〈これが〉の相違」がわからないということである。こうした具体的な事柄をあげるのが、「日本語をいいかげんにしか知らない」という程度の高さを表すことと関連しているのではあるが、サエが担うのは程度の高さを表す具体的な事柄を提示するに留まるとも言える。(25)のサエは「家や景色の端っこ」を撮影できないことを表している。これもまた、「絶対に写真撮影を許されない」程度の高さを表すための具体例である。具体例をあげることが事態全体の程度の高さを表すことにつながるのか、それとも事態全体の程度の高さを表すために具体例をあげるのは、文中・文脈からは見えてこない。つまり、聞き手・読み手にとって客観的に確認できるのは、サエが具体例をあげているということに尽きる。

(26) 野鳥は、ひとところにくらべて、ずっと多くなった。野鳥公害という言葉さえあらわれるにいたっている。これは、なんといっても、野鳥の保護が徹底したためである。それと、農薬の使用が減ったためである。(BCCWJ『男性自身巨人ファン善人説』)

(26)の例が表すのは“野鳥が昔よりずっと多くなった”ということと読める。一方、サエが表すのは“野鳥公害という言葉があらわれた”ということ、換言すれば“野鳥が公害になっている”ということである。“野鳥が公害になっている”という事態そのものは驚かれることである。ただ、“野鳥が昔よりずっと多くなった”という前の文脈なしに、“野鳥公害という言葉があらわれた”というサエの表す事態のみが語られている場合、野鳥の数がかなりの程度に増えたことまで、果たして表し得るであろうか。サエの用いられた一文だけであれば、“野鳥の生息域が人間の生活圏に近くなった”ということや、“野鳥が人間を恐れなくなった”という事態の程度が高いことを表していると読むことも可能である。

(27) 紀州は冬の暖かい国だから炉端とか置炬燵などの設備が家の中にさえ少ないのに、機は濡縁のようなところに置いてあるので風が吹けば吹きさらしの中で織ることになる。冷たい

雨から辛うじて濡れることはなかったものの、その寒さは躰の芯が凍えるほどであった。(華岡青洲の妻)

(27) において文脈が伝えようとしていることは、機織りをしていると「躰の芯が凍えるほど」寒いということである。その中でサエは“暖かくする設備が家の中にも少ない”ということを取り上げ、そこから“機のある濡縁には暖かくする設備がない”ということを類推させている。サエによって類推される“機のある濡縁に暖かくする設備がない”ということは、文脈が伝える寒さの程度の甚だしさを表すことにつながる。しかし、サエ自体が表す“暖かくする設備が家の中にも少ない”ということは、前の“紀州の冬は暖かい”という程度が高いことを表すことにつながっているとも読める。

「性質・状態の極限性」は、それを表しているのとれる明確な文脈がある場合も確かにある。ただし、客観的に聞き手・読み手に確認できるのは、サエが「性質・状況の極限性」を表すことにつながる具体的な事例を取り上げているということだけである。中には、サエが取り上げる事例が、文脈が表す「性質・状態の極限性」の具体例と言えるかどうかについても判然としない場合もある。「性質・状態の極限性」については、分析する者が文脈からまさに読み取らなければならない、第三者にも検証可能な方法で、サエが「性質・状態の極限性」を表しているか否かの判断をすることは、聞き手・読み手にはできない。可視的なもの、客観的な根拠から言語形式の意味を記述するという方法論に忠実であろうとすると、助詞が「性質・状況の極限性」を表しているか否かは判定できないということになる。

#### 4.2 ii. 他の用法との関係

サエにはここまで見てきた用法の他に、十分条件を表す用法がある<sup>7</sup>。

(28) トラにとって人間は唯一の恐ろしい敵である。人間の影響さえなければ、トラは昼間でもよく活動する。(BCCWJ『トラ』)

(28) では“トラが昼間活動する”という後件が成り立つには、例えば、“気温が適当である”などの諸条件が整った方がいいのはもちろんであるものの、そうした条件が整わなくても“人間の影響がない”ということが成り立てば十分であることを表している。この十分条件を表すサエの性質と、4.1において文中・文脈の共起成分から考察したサエの性質が同様であれば、4.1の考察結果の妥当性が確認されよう。以下、項目間の序列の最端を示すか、起こったことを表すのか、

---

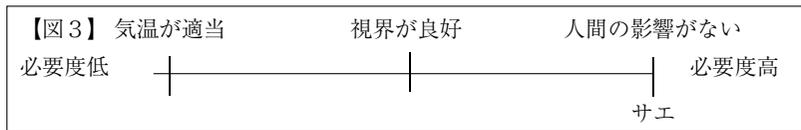
7 この用法は、本来古語のダニが表していたものを、用法を拡張したサヘが表すようになったものであり(高山2003、鈴木2005)、ここまで見てきた用法とはルーツが異なる。しかし、本来ダニの用法であったものを、他の助詞ではなく、サヘが吸収したのは、これがサヘ本来の用法と齟齬しないからであったと推測される。従って、本稿で扱う用法について考える際に、十分条件を表す用法を参照することは無意味ではなからう。

という2点について見ていく。

#### 4.2.1 項目間の序列の最端を示すか

(28) トラにとって人間は唯一の恐ろしい敵である。人間の影響さえなければ、トラは昼間でもよく活動する。(再掲)

(28) の後件が成り立つには、例えば、“気温が適当である”、“視界が良好である”といった条件がある中、サエが示すのは、“人間の影響がない”という条件である。「トラにとって人間は唯一の恐ろしい敵である」と前の文にあることから、サエの示す“人間の影響がない”ということは、後件成立のための条件の中で、最も必要度が高いことが分かる。



十分条件を表すサエは、(28) のように後件成立のために、最も必要度が高い条件を提示することもあるが、丹羽 (1995) にも論じられているように、最も必要度が高い条件ではない、という場合もある。

(29) ニューヨークの地下鉄車両のペインティングは写真などでよく知られているが、場所と素材さえ選ばなければ、エア・スプレーさえ一本持って歩けば、どこでも自由に制作できたのである。(BCCWJ『現在美術』)

ニューヨークの地下鉄車両ペインティングのような作品を制作するには、“制作の時間があること”や、“作品のイメージが出来上がっていること”など、整っていることが望ましい条件がいくつあろう。しかし、(29) には“場所と素材を選ばないこと”、“エア・スプレーが一本あること”が成り立てば十分であるとある。エア・スプレーがないことには描けないので、2つのうち“エア・スプレーが一本あること”がより満たされることの必要性が高い条件だと理解されるが、“場所と素材を選ばないこと”もサエで示されている。従って、当該のサエは必ずしも後件成立の必要度によって並べた条件が形成するスケールの最も端を示さなくてもよい、ということが分かる。

4.1.1 で見たサエと、本節で見ているサエは、用法は異なるものの、項目間の序列の最端を示さずともよいという性質において一致していることが分かる。

#### 4.2.2 起こったことを表すか

十分条件を表すサエは、後件が恒常的に成立すること、あるいは既に成立したことを表す場合

と、そうではない場合がある。

(28) トラにとって人間は唯一の恐ろしい敵である。人間の影響さえなければ、トラは昼間でもよく活動する。(再掲)

(29) ニューヨークの地下鉄車両のペインティングは写真などでよく知られているが、場所と素材さえ選ばなければ、エア・スプレーさえ一本持って歩けば、どこでも自由に制作できたのである。(再掲)

(30) わたしさえ黙っていれば、怪我のことなど世間に洩れはしないでしょう (BCCWJ『姿見ずの橋』)

(31) 「御主人が事故にさえ遇わなかったなら、奥さんもスナックなんか勤めなくてよかったはずだったのだから」(BCCWJ『北のレクイエム』)

(28) は恒常的に成り立つことを、(29) は既にも実現したことを後件で表している。一方、(30) は「でしょう」とあり、これから成り立つという推測を、(31) は「はずだった」と、事実に反することを表し、いずれも後件は未実現の事柄である。4.1.2 で見たサエも、実現していること、あるいは実現したことを表す場合だけでなく、未実現の場合にも用いられている。必ずしも「起こったこと」のみを表すのではない性質は、用法を問わず一致している。

## 5. おわりに

「極限」は、副助詞、あるいは取り立て助詞の記述・研究において、当該助詞の意味を端的に示せることからたびたび用いられてきた。しかし、この術語は、実は3種の意味で用いられている。では、「極限」という術語のもとに説明されてきた3種の意味を、実際にサエが表しているのか。分析する者は「聞き手・読み手」であって、「話し手・書き手」ではないという、ごく当たり前ではあるが、見過ごされがちなことを念頭に、文中・文脈の共起成分に着目して考察するという、意味記述の基本に忠実に分析すると、「性質・状況の極限性」については必ずしも再現性があるとは言えない。あわせて、サエは項目間の序列によるスケールの端を常に示すわけではないこと、また「起こったことの極限性」を常に表すわけではないことも確認された。この結果は、十分条件を表すサエの用法とも一致していることから、その内容の妥当性も裏付けられる。つまり、サエは、従来論にある3種の「極限」ではその意味を十分に示せていないということになる。

この結論は、従来の「極限」の捉え方を否定するものでは決してない。記述する者が定義を示し、「極限」という術語をその定義に即して用いることに問題はない。問題は、3種の意味で用いられていることに触れず、定義も示さないままに「極限」という術語を便利使いしたり、「極限」という術語を使えば当該形式の意味が説明されたと見なしたりすることにある。では、サエが表すのは「極限」ではなく何であるのか。これについては、改めて論じる。

【参考文献】

- 井島正博 (2007) 「「サエ・マデ・デモ・ダッテの機能と構造」『日本語学論集』3、pp.45-82、東京大学
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
- 尾山慎 (2019) 『二合仮名の研究』和泉書院
- 菊地康人 (2003) 「現代語の極限のとりたて」『日本語のとりたて ―現代語と歴史的变化・地理的変異』  
沼田善子・野田尚史 (編)、くろしお出版、pp.85-105
- 鈴木ひとみ (2005) 「副助詞サエ (サヘ) の用法とその変遷 ―ダニとの関連において―」『日本語学論集』  
創刊号、pp.33-54、東京大学
- 高山善行 (2003) 「極限のとりたての歴史的变化」『日本語のとりたて ―現代語と歴史的变化・地理的変異』  
沼田善子・野田尚史 (編)、くろしお出版、pp.107-122
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中西久美子 (1995) 「モとマデとサエ・スラ ―意外性を表すとりたて助詞―」『日本語類義表現の文法 (上)  
単文編』 pp.306-316、くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009) 「第9部 とりたて」『現代日本語文法 5』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13、pp.93-128、大阪市立大学
- 丹羽哲也 (1995) 「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究』47-7、pp.25-51、大阪市立大学
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 ―改訂版―』くろしお出版
- 藪崎淳子 (2017) 「取り立て」再考『日本語教育』166号、pp.15-30  
『時代別国語大辞典上代編』三省堂

【用例出典】

- BCCWJ『現代日本語書き言葉均衡コーパス』／『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』／桐島洋子 (1990) 『聡明な女は料理がうまい』文春文庫／林望 (1995) 『イギリスはおいしい』文春文庫